

山口県立萩美術館・浦上記念館

# H A G I

HAGI URAGAMI MUSEUM MAGAZINE

# 萩

# 116

SUMMER ISSUE  
2025





図1 灰釉兔形壺／黒褐釉兔形壺 クメール 12～13世紀



図2 青磁鳥形水注 タイ 15世紀

# 躍動するアジア陶磁

## —町田市立博物館所蔵の名品から—

本展覧会は、東京都にある町田市立博物館（現在休館中。2029年に（仮称）町田市立国際工芸美術館としてリニューアルオープン予定）のコレクションの中から、中国と東南アジアのバラエティ豊かな陶磁器135件を厳選し、その技法的な文脈に沿って一気にご覧いただくという企画です。日本・中国・朝鮮など東アジアの陶磁器を取り上げた展覧会はよくあると思いますが、中国と東南アジアの陶磁器を俯瞰して見る機会はありません。今回の展覧会では、俯瞰することで見えてくるアジア陶磁の面白さを、そのスタイルごとに6章立てで紹介します。

### 第1章 東南アジア陶磁の黎明

本章の前半では、10世紀以前の中国とベトナムの陶磁器を比較しながら展示します。紀元前111年、中国の漢王朝は現在のベトナム北部を領土に編入しました。この時代、中国の進んだ窯業技術がもたらされたことにより、ベトナムは東南アジアで最も早く施釉陶器を生産する地域になり、東南アジア陶磁の大きな柱となります。

本章の後半では、東南アジア各地の多様な土器を取り上げます。ベトナム以外の東南アジアの地域では、釉薬を施さない土器が主に使われていました。土器というと原始的に感じますが、水を入れると気化

冷却により中の水が腐りにくくなり、東南アジアの風土に適していました。このため、東南アジアでは古代から一貫して土器を使う文化があり、時代・地域・民族ごとに多様なスタイルが生み出されたのです。

### 第2章 淡緑と褐色の造形

本章では、東南アジア陶磁のもう一つの柱として、現在のカンボジアを中心に栄えたクメール王国（802～1431年）の陶磁器を取り上げます。クメール王国では、施釉陶器が9世紀頃から作られ始めました。当初は淡い緑に発色する灰釉が中心でしたが、後に鉄分が多い黒褐釉も使われるようになります。これら2種類



図3 鉄絵龍鳳文壺 中国 14世紀

の釉薬による装飾に加え、インドの要素をもった形や、デフォルメされた動物の像など(図1)、オリジナリティあふれる陶磁文化が花開きました。そしてクメールの窯業技術は、タイやミャンマーの諸王国に引き継がれ、東南アジアの多様な陶磁文化の礎となりました。

### 第3章 色の競演

本章では、釉薬の色で魅せる中国とベトナムの陶磁器を展示します。中国の宋朝(960~1279年)では、落ち着きのある美しさを好む文人たちが文化の担い手となりました。陶磁器においても、華やかな装飾を施すのではなく、釉薬の色そのものを生かした装飾が流行しました。他方、ベトナムに建国された李朝(1009~1225年)と陳朝(1225~1400年)では、中国の文化を積極的に取り入れていました。陶磁器についても中国の美意識を受けつつ、釉薬に改良が加えられ、カラーバリエーション豊かな陶磁器が作られました。

### 第4章 多様な青磁

本章では、中国と東南アジア各地で作られた多様な青磁を紹介します。青磁は、青色の釉薬がかかった陶磁器のことで、良い発色を得るためには高い技



図4 鉄絵魚文盤 タイ シーサッチャナーライ窯  
スコータイ〜アユタヤ朝 15世紀

術が必要でした。窯業先進国であった中国では2世紀頃に青磁が完成していましたが、東南アジアにおいて青磁を作ることができたのは長らくベトナムだけでした。これが13世紀になると、クメールから独立したタイ中部で深緑色の青磁が作られるようになり(図2)、ほどなくしてタイ北部・ミャンマーなど、各地で青磁の生産が始まります。それらは中国の青磁から受けた要素を持ちつつも、それぞれに独自の風格を備えています。

### 第5章 黒の表現

本章では、様々な黒色の表現を取り上げます。陶磁器の黒い色は、おおむね鉄によって発色しています。中国では3世紀頃以降、鉄顔料で絵付けする「鉄絵」の技法が確立され、陶磁器の上に絵を描くことができるようになります(図3)。13世紀頃には東南アジアでも鉄絵が作られ、各地で個性的な文様が描かれました(図4)。また、黒い釉薬や顔料を塗った後に、文様部分を削り落とす「掻き落とし」など、黒色の顔料を使った多様な表現が生み出されました。

### 第6章 多彩の美

本章では、様々な色を用いて彩られた陶磁器を紹介します。14世紀の中国景德鎮窯では、コバルト顔

料で青い絵付けをした「青花」が<sup>せい か</sup>生み出され、多くの国で流行したため、各地でその模倣が試みられます。例えば、ベトナムでは白化粧土で白い下地を作ることにより青花を生み出し(表紙)、ミャンマーでは銅の発色による緑色の絵付けが行われました(図5)。

また青花だけでなく、釉の上に赤・黄・緑などで絵付けした「五彩」や、粘土を盛り上げた線の中に顔料を塗る「法花」など、鮮やかな装飾技法が多く生み出され、アジア陶磁は華やかに彩られました。

以上のように、技術的には中国から東南アジアに向かう大きな流れがあり、さらに民族の複雑な移動や美意識の流行を受けて相互に混ざり合い、様々な陶磁器が生みだされました。このように技術の伝播と発展がアジアの各地で起こる様は、まさに陶磁器がいきいきと躍動しているように感じられます。本展覧会を通じてアジア陶磁のダイナミズムを感じ、その背景にある雄大な歴史に思いを馳せていただけますと幸いです。

(町田市立博物館学芸員 新井崇之)



図5 白釉緑彩鳥文盤 ミャンマー  
バゲー〜タウンゲー朝 15~16世紀

# 陶磁の躍動する

町田市立博物館所蔵の名品から

Dynamism of Asian Ceramics  
The Masterpieces from the Machida City Museum Collection



2025  
7/12(土)~  
9/23(火・祝)

【休館日】  
7月14日(月)・22日(火)・28日(月)、  
8月12日(火)・18日(月)・25日(月)、  
9月8日(月)・16日(火) ※9月22日(月)は開館

【開館時間】  
9:00~17:00(入場は16:30まで)

【観覧料】  
一般1,200円(1,000円)、  
学生・70歳以上1,000円(800円)  
※( )は前売りおよび20名以上の団体料金。  
※高等学校、中等教育学校、特別支援学校の生徒は無料。  
※障害者手帳等をご持参の方とその介護の方1名は無料。  
※前売り券は、ローソンチケット(Lコード62144)、  
セブンチケットでお求めいただけます。  
※開催中のコレクション展示もご覧いただけます。

【主催】躍動するアジア陶磁展実行委員会  
(山口県立萩美術館・浦上記念館、毎日新聞社、tvsテレビ山口)  
【後援】山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会  
【協力】町田市立博物館 [特別協力] エフエム山口 [企画協力] AshI

18歳以下  
無料



## 関連Event

ギャラリー・ツアー

要観覧券  
申込不要

担当学芸員による展示解説  
【日時】会期中の毎週日曜日 11:00~12:00

## 記念講演会

聴講無料  
申込不要

「色と形でみる、  
アジア陶磁器の躍動する歴史!」

【講師】新井崇之氏(町田市立博物館学芸員)  
【日時】7月12日(土) 13:30~15:00  
【会場】当館講座室

## キッズ体験コーナー

[協力]福岡市博物館

## 萩美でアジア体験!

展覧会の期間中、萩美術館のエントランスに東南アジアのおもちゃや楽器、衣服、生活雑貨を手にとって遊べるコーナーを設置します。子どもから大人まで楽しめる、カラフルで不思議な世界にGO!

# アジア陶磁の茶道具 — 取り合わせの楽しみ

【会期】6月24日(火) — 9月28日(日)

中国からもたらされた抹茶を飲む喫茶の風習は、室町時代に茶の湯という日本独自の文化として新たに発展し、桃山時代に千利休(1522～91)が茶の湯を大成して以降は、武家や公家をはじめ、町人へもさらに広がり、江戸時代には遊芸の一つとして展開していきました。

茶の湯に用いられた茶道具は、時代時代の茶の湯に関わる人々の好みや美意識が反映され、日本で見立てられた中国、朝鮮、東南アジアの多様なうつわのほか、日本で茶の湯のために作られた和物のうつわも知られています。

本展では、特別展「躍動するアジア陶磁 — 町田市立博物館所蔵の名品から —」開催に合わせ、当館所蔵の中国陶磁、朝鮮陶磁、ベトナム陶磁、日本陶磁といったアジア陶磁の中から、茶陶や茶道具に見立てたやきものを展示し、これまで茶人たちがその取り合わせの妙を楽しんだ茶の湯のうつわの世界を紹介します。

## 浦上敏朗氏旧蔵のベトナム陶磁コレクション

当館は、萩市出身の実業家であった浦上敏朗氏(1926～2020)が蒐集された浮世絵と東洋古陶磁を核としたコレクションを、平成5年(1993)に山口県に一括して寄贈されたことを契機として開館しました。当館が所蔵する浦上敏朗氏旧蔵のベトナム陶磁コレクションは、浦上氏が生前最後に寄贈する意志を示されたもので、残念ながら生前に御寄贈が叶わず、浦上敏朗氏の没後、御長男である浦上満氏がその御遺志を継いで御寄贈されたものです。

その内容は、ベトナム陶磁が最も隆盛した15～16世紀の青花や五彩の作品(図1～3)で、いわゆる「安南染付」と呼ばれる茶碗、水指、香合などを中心とした茶道具一式となっています。実はこれらは、浦上敏朗氏の夫人である翠氏が生前茶の湯の道具としてお使いになっていたものです。今回のコレクション展「アジア陶磁の茶道具 — 取り合わせの楽しみ」では、そのベトナム陶磁コレクションも一堂に展示し、これまで親しみを持って賞翫されてきた「安南」のやきものの魅力に改めて触れられる機会となれば幸いです。



図1 青花菊唐草文碗(茶碗) ベトナム 15～16世紀  
当館蔵(浦上満氏寄贈)



図2 青花牡丹唐草文壺(水指) ベトナム 15～16世紀  
当館蔵(浦上満氏寄贈)



図3 五彩花卉文合子(香合) ベトナム 16世紀  
当館蔵(浦上満氏寄贈)

新里明士

差異を繰り返かえず、まだ

Repeat a difference, still

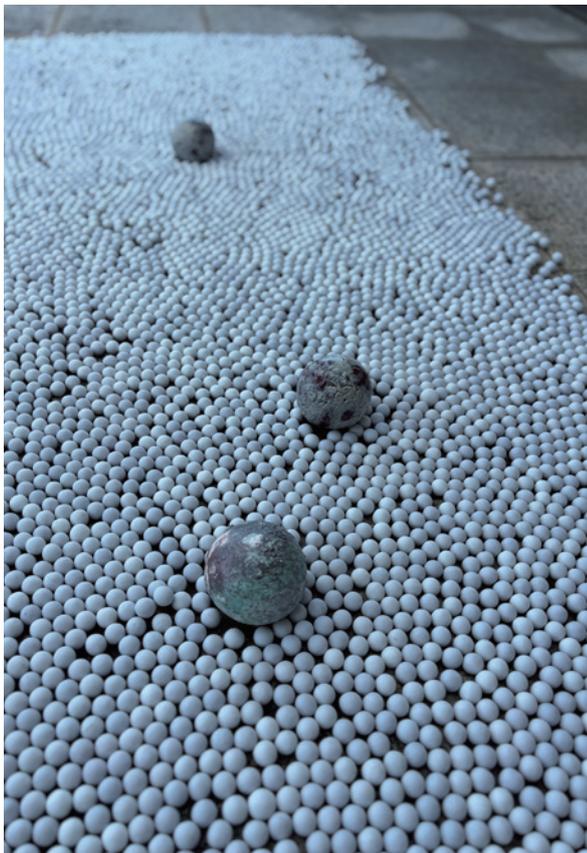
2025年4月4日[金]—2026年3月1日[日]





## 茶室展示

# 「新里明士 差異を繰り返かえす、まだ」に寄せて



半身を差し入れられるほどに開いた障子のあいだから、ほの暗い茶室の様子をうかがうようにのぞき込む。すると、大小さまざまな菱形の透かし模様をまとった二つの白いかたちが眼に飛び込んできた。形姿の堂々としたほぼ同じ寸法の深鉢だ。

四畳半敷の踏込畳と炉畳にすえられた二つの大器は、鋭く薄く立ち上げられたその全容を、スポットライトの強い光の下で露わにしている。しばらくして、白光のまばゆさに眼が慣れてくると、白いかたちの素地と透かし模様とが対照的な表情を浮かべているのに気づく。

二つの表情とは、器の内面の真っ白な素地に染みこんだ透かし模様の淡い翳りと、逆光を受けた素地の浅い透影にほんのり点る透かし模様の煌めき。つまり、反射光や透過光が物質に作用して明らかにした質感（マチエール）の仮象のことだ。とくに光覚の鋭敏な人は、素材に相応しい光の作用を吟味して、自らの表現性をより豊かなものに創り上げようとしてきた。

白いかたちは、それぞれが大きな円い鏡の上に置かれている。またその手前（観者側）にも各々大小二枚の円鏡が配されて、逆光を受けた白いかたちの透かし模様の煌めきを鏡面に浮き立たせている。これも光を増幅してかたちの表現性を演出する創意の現れといえる。

つぎに上座の床に眼を転じると、右方に古材の敷板に載った、白い器の破れたかたちが見える。奥壁の近くに落としたスポットライトのせいで、かたちの輪郭は判るが、破れた鉢形に施された透かし模様は暗く沈んでいる。奥壁前に落とされた光が内面へ透けたところから、おそらく径の異なる小孔をびっしりとうがった透かし文様が施されているのだろう。左方には、右の器から破れたと思われる3片と、ビー玉大ほどの白い球状のかたち（とりあえず白磁団子と呼んでおく）が飛び散ったように撒かれている、なんともにぎやかな床飾りである。その奥壁には、白磁団子を数珠つなぎにした緩い紐状のかたちが、中釘に回し掛けされている。

このようにして、茶室の空間性を賞美する際にながらう有為の条件とみなされてきた、しっとりとした陰翳の濃淡は、スポットライトという人工照明の光を浴びた白

いかたちが照り返す、光量差でめりはりのついたコントラストという、光輝の強弱に置き換えられている。

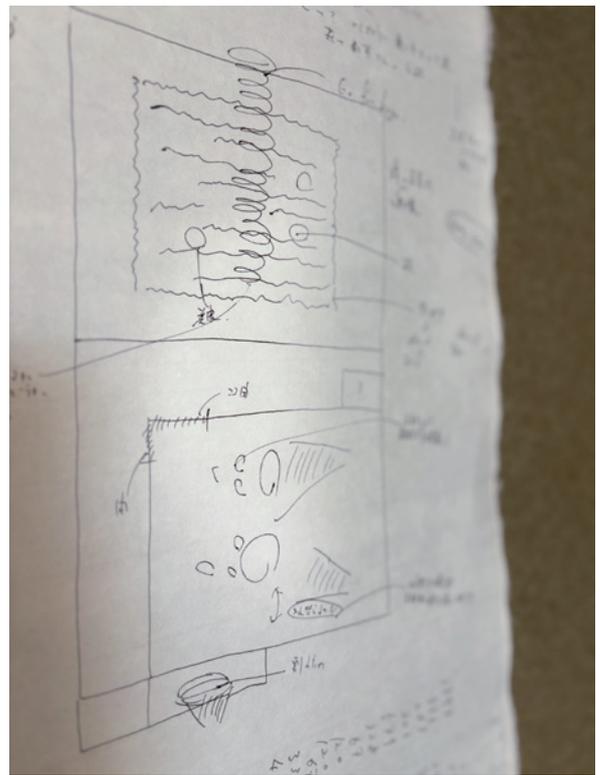
光を精妙に反照し透過させる白いかたちは、新里明士(1977年生まれ)が2003年の作家デビュー以来一貫して制作してきた、〈光器〉シリーズの近作3点だ。透光性の高い磁土を用いて立ち上げた薄づくりの生素地に、「光点」と呼ぶ小さな孔を丁寧に開けて模様を成し、そこに透明釉を埋め込んで焼成している。

ところで、磁土の素地に透彫で文様を施してから、粘性の高い半透明の釉薬を掛けて焼成する加飾法は、光を透して文様がほんのり浮き上がるのを螢の光にたとえて、「螢手」と呼ばれる。堺環濠都市遺跡から出土した「康熙年製」銘(1662～1772)の染付小皿や、台湾の国立故宮博物院蔵「大清乾隆年製」銘(1736～1795)の白磁碗といった、17～18世紀の清朝磁器の作例などが知られている。螢手の技法は、日本にも伝わって有田焼などの肥前磁器や近代陶磁の精品にも取り入れられた。

新里の〈光器〉も、原理的には螢手であり、それを独自に深化させた表現性ということになる。ただし、光の捉え方つまり陶表現の造形要素としての光の扱い方において、かれの造形思考は螢手のそれと正反対を向いている。

従来の螢手技法は、影絵の明部と暗部を反転させたようなもので、透彫で絵画的な表現をめざしたものだ。これに対して新里の〈光器〉は、かたちに不可分な光点として集合し成立すべき、未知の一点をうがつことから始めて、薄胎半透明のマチエールを透過した光を、動的な律動や振幅を表示するかたちとして可視化しようとする。つまり、〈光器〉はその名称のとおり、光をかたちに還元して、光そのものを表現しようとする陶造形なのである。

新里はこのたびの茶室展示のタイトルを「差異を繰り返す、まだ」とした。これは、フランス現代思想家のジル・ドゥルーズ(1925～1995)を念頭に置いたものらしい。あいにく、1968年のその難解な哲学研究『差異と反復』に照らしてタイトルの真意を推し量る能力を持ち合わせていない。なので、これから述べることは、反復し逡巡し回帰する造形思考の奔流に、日々制作を重ねる表現者の知的原風景についての一憶測



にすぎない。

かれがこのたびの茶室展示で表現したかったのは、主に光量差に依拠しながらマチエールに陶醉してきた自分自身を対象化することではなかったか。というのは、これまでのインスタレーションにもたびたび見られ、いままたそれを繰り返している、逆光と鏡面へのこだわり、かれの物質的感触への愛執が滲み出ているように感じるからだ。

もう少し言うと、透過光によってかたちに示された、透彫と光点のマチエールは物質の仮象(みせかけ)だ。これをやはり虚像(みせかけ)として反照する鏡面の活用に、実体すなわち物質的感触への反省と憧憬が隠されているのではないかと考える。それは、床飾りにされた古材、破れた器とその破片、土くれを丸めただけの白磁団子や、バルコニーに展示した、みっちりと方形に並べた大小の白磁団子、その上空に平らな土環を糸でつないで吊るしたオブジェからも感じられる。

仮象や虚像も否定せず、マチエールという観点ですべて肯定的に捉えながら、光覚の表現性をかたちにひたすら追求し続けてきた〈光器〉は、いまや陶造形表現に一つの高みを示した。このたびの茶室展示はその集大成といえる。かれが見つめる物質的感触が、つぎにどのような高みをめざすのかたのしみだ。

石崎泰之(岐阜県現代陶芸美術館館長)

コレクション展（浮世絵）

展示室1（本館1F）

つきおかよしとし      ふうぞくさんじゅう に そう  
月岡芳年      風俗三十二相

【会期】6月24日(火) — 7月27日(日)

「風俗三十二相」は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師、月岡芳年(1839-1892)の美人画の代表作です。本シリーズでは、遊女、奥方、町娘といったさまざまな階層の女性たちをとりあげ、当時流行していた江戸回顧の風潮を反映して、江戸寛政期から明治にいたるまでの各時代の装いで描き分けています。

「三十二相」とは本来は仏教用語で、仏の身体にそなわっている32種類の優れた特徴をいいます。本シリーズでは「さんじゅうにそう」という読みを掛けて、32名の女性たちが「〇〇そう」なしぐさや表情で描かれているのが見どころです。



月岡芳年「風俗三十二相 いたさう 寛政年間女郎の風俗」  
大判錦絵、明治21年(1888)

展示室1（本館1F）

きょうしゅう      ふうけい      かわせ      はすい  
郷愁の風景—川瀬巴水

【会期】7月29日(火) — 8月24日(日)

川瀬巴水(1883-1957)は、大正から昭和にかけて活躍した木版画家です。27歳で鏗木清方(1878-1972)に入門。大正7年(1918)に同門の伊東深水が版元の渡邊庄三郎(1885-1962)と組んで制作した新版画「近江八景」に魅了され、このことがきっかけとなって、同年、自身も渡邊のもとで塩原を主題とする三部作を手がけて好評を得ます。

その後は、新版画を代表する風景画家として活躍し、住み慣れた東京をはじめ、日本全国を旅して描いたスケッチをもとに版画をつくるという暮らしを亡くなる直前まで続けました。各地の風景を旅情豊かに描きとめ、人々の穏やかな暮らしを点景に取り入れた巴水の作品は、見る人を古きよき日本へと誘います。



川瀬巴水「旅みやげ第三集 福岡西公園」  
多色摺木版画、昭和3年(1928)

## 展示室1 (本館1F)

# うきよえわか 浮世絵と和歌

【会期】8月26日(火) — 9月28日(日)

浮世絵版画は江戸市民に愛好されましたが、その画題には当時の風俗や文学(戯作)ばかりでなく、古典文学の和歌も取り上げられ、描かれました。主に百人一首や六歌仙といった広く知られた和歌の歌意を描く作品、歌仙の肖像画や六玉川などの歌枕を描いた風景画などが挙げられます。また当世の日常の場面に和歌の意味を重ねた“見立絵”も多く描かれました。

本年は六歌仙のひとり在原業平(825~880)の生誕1200年にあたることから、六歌仙をはじめ和歌を題材にした浮世絵版画作品をご紹介します。



葛飾北斎「六歌仙 在原業平」  
文化(1804~1817)中期頃

## 展示室1 (本館1F)

# うたがわくによし 歌川国芳 I

【会期】9月30日(火) — 10月26日(日)

歌川国芳(1797~1861)は、同じ歌川派の国貞や広重と並び幕末の浮世絵界をリードした絵師です。水滸伝の連作が大好評となって以来、「武者絵の国芳」として不動の人気を得ました。その他にも戯画、美人画、役者絵や風景画といった様々な主題で、西洋の表現を取り入れた新しい感覚と、ユーモアにあふれた魅力的な作品を残しました。国芳の自由で斬新な表現は、“奇想”と称えられています。

今回は国芳の画業を2回にわたりご紹介します。前半のIでは、武者絵や物語絵、戯画をご覧ください。



歌川国芳「相馬の古内裏」弘化期(1844~1847)

# SCHEDULE 令和7年度(7月~9月)

■ 休館日 ★ イベント ● ギャラリー・ツアー ◆ ギャラリー・トーク

7 JUL	1 火	2 水	3 木	4 金	5 土	6 日	7 月	8 火	9 水	10 木	11 金	12 土	13 日	14 月	15 火	16 水	17 木	18 金	19 土	20 日	21 月	22 火	23 水	24 木	25 金	26 土	27 日	28 月	29 火	30 水	31 木
展示室1	浮世絵:月岡芳年 風俗三十二相 (~7/27)																														
展示室2	東洋陶磁:アジア陶磁の茶道具—取り合わせの楽しみ (~9/28)																														
展示室3~6	特別展 躍動するアジア陶磁—町田市立博物館所蔵の名品から—(7/12~9/23)																														
展示室7	工芸:彩りの漆芸 (~8/31)																														
展示室8	特集展示:追悼 人間国宝 山本晃一彫金のわざと美 (~8/31)																														
特選鑑賞室	東洲高写楽「三代目瀬川菊之丞の田辺文蔵妻おしづ」(7/1~7/31)																														
茶室	新里明士 差異を繰り返す、まだ Repeat a difference, still (~2026.3/1)																														
8 AUG	1 金	2 土	3 日	4 月	5 火	6 水	7 木	8 金	9 土	10 日	11 月	12 火	13 水	14 木	15 金	16 土	17 日	18 月	19 火	20 水	21 木	22 金	23 土	24 日	25 月	26 火	27 水	28 木	29 金	30 土	31 日
展示室1	浮世絵:郷愁の風景—川瀬巴水 (~8/24)																														
展示室2	東洋陶磁:アジア陶磁の茶道具—取り合わせの楽しみ (~9/28)																														
展示室3~6	特別展 躍動するアジア陶磁—町田市立博物館所蔵の名品から—(~9/23)																														
展示室7	工芸:彩りの漆芸 (~8/31)																														
展示室8	特集展示:追悼 人間国宝 山本晃一彫金のわざと美 (~8/31)																														
特選鑑賞室	喜多川歌麿「青楼仁和嘉女芸者部 大万度 荻江 おいよ 竹次」(8/1~8/31)																														
茶室	新里明士 差異を繰り返す、まだ Repeat a difference, still (~2026.3/1)																														
9 SEP	1 月	2 火	3 水	4 木	5 金	6 土	7 日	8 月	9 火	10 水	11 木	12 金	13 土	14 日	15 月	16 火	17 水	18 木	19 金	20 土	21 日	22 月	23 火	24 水	25 木	26 金	27 土	28 日	29 月	30 火	
展示室1	浮世絵:浮世絵と和歌 (~9/28)																														
展示室2	東洋陶磁:アジア陶磁の茶道具—取り合わせの楽しみ (~9/28)																														
展示室3~6	特別展 躍動するアジア陶磁—町田市立博物館所蔵の名品から—(~9/23)																														
展示室7	設備改修工事のため休室 (9/1~2026.1/16 (予定))																														
展示室8	設備改修工事のため休室 (9/1~2026.1/16 (予定))																														
特選鑑賞室	東洲高写楽「三代目市川高麗蔵の志賀大七」(9/1~9/30)																														
茶室	新里明士 差異を繰り返す、まだ Repeat a difference, still (~2026.3/1)																														

※1 浮世絵:郷愁の風景—川瀬巴水 (7/29~8/24) ※2 歌川国芳I (9/30~10/26) ※3 古萩 (9/30~12/21)

- ★ イベント**  
記念講演会  
【日時】7月12日[土] 13:30~15:00  
【演題】「色と形でみる、アジア陶磁器の躍動する歴史」  
【講師】新井崇之氏(町田市立博物館学芸員)  
【会場】講座室(座席数84席)  
アートフェスティバル2025  
【内容】子どもから大人まで楽しめるワークショップとイベントが盛りだくさん!  
【日時】8月11日[月・祝] 9:00~16:00
- ギャラリー・ツアー (担当学芸員による特別展 作品解説)**  
「躍動するアジア陶磁—町田市立博物館所蔵の名品から—」  
【日時】会期中の毎週日曜日 11:00~12:00  
【会場】本館2階展示室
- ◆ ギャラリー・トーク (担当学芸員による展示作品解説)**  
いずれも11:00~(30分程度)  
◆ 7月12日[土] 月岡芳年 風俗三十二相  
◆ 7月26日[土] アジア陶磁の茶道具—取り合わせの楽しみ  
◆ 8月 9日[土] 郷愁の風景—川瀬巴水  
◆ 8月23日[土] 追悼 人間国宝 山本晃一彫金のわざと美  
◆ 9月13日[土] 浮世絵と和歌  
◆ 9月27日[土] アジア陶磁の茶道具—取り合わせの楽しみ

※ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。  
※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。

臨時的休館やイベントを中止・変更する場合があります。

詳しくは当館ホームページをご覧ください。

お問い合わせ  
TEL 0838-24-2400  
URL <https://hum-web.jp/>



公式HP

## 表紙について

青花牡丹文盤 ベトナム 黎朝 15世紀 町田市立博物館所蔵

青のコバルト顔料で絵付けを施したベトナム青花の大盤で、見込みには大輪の花を咲かせた牡丹の折枝文が白地に鮮やかな青の発色で描かれています。この牡丹文のスタイルが、トルコ・イスタンブールのトプカプ宮殿博物館が所蔵するベトナム黎朝大和八年(1450)銘の青花牡丹唐草文天球瓶の牡丹文のスタイルと類似することから、本作が中国の青花磁器の模倣から脱し、ベトナム青花独自の美意識を確立した15世紀の優品であることがわかります。

## 交通アクセス

- 【新山口駅から】**
  - 直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で 萩・明倫センター下車、徒歩約5分
  - 防長バス(約90分)で 萩バスセンター下車、徒歩約12分
- 【山口宇部空港から】[萩・石見空港から]**
  - 萩近鉄タクシー(乗合タクシー) 約70~80分(利用前日までに要予約)
  - JR山陰本線
    - JR萩駅からタクシー約7分
    - JR東萩駅から萩循環まあるバス(西回り)約20分
    - JR玉江駅から徒歩約20分
- 【自動車】**
  - 「中国自動車道」美祿東JCT経由、
  - 「小郡萩道路」絵堂ICから約20分
  - 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



最新情報は公式SNSで